

Modern Japan in Comparative Imagination
An Interdisciplinary Conference at Durham University,
9-10 May, 2019 参加報告

稲賀 繁美

小規模だが重要な国際的研究会が、表題のもとに開催された。若手から中堅の日本研究者の発表が中心だったが、別格の招待者としては Carol Gluck、Harry Harootunian のほか、本センターの坪井秀人氏が含まれる。会場はイングランド北部の古い大学町。新緑に覆われたウィアー川は、町の中央で大きく湾曲する。そのさなか、浸食から残されて佇立する丘陵のうえに、ダーラム大聖堂の巨大な伽藍が聳える。その背後に控える古城の二階奥の Senate Room が会議会場に割り当てられた。日本の歴史、文学、美術の研究者を中心とした領域横断の集いであり、国籍や文化間の境界を跨ぐ比較の方法論を含めた議論が中心となる。

第一の話題は東西比較における日本近代の位置。Raja Adai は比較教育学の立場から日本の美術教育における書道の位置



ダーラム城。学会会場（撮影：稲賀 2019年5月9日）

づけをエジプトの能書の場合と比較。「書ハ美術ナリヤ」の論争をイスラーム圏の経験に投射した。非西欧は対峙する西欧近代と自らとを比較したが、そうした東西比較そのものの文化圏を跨いだ相互比較というメタ水準の提唱。つづくAleksandra Kobijlskiは京都における新島襄の同志社創設を、背後にある北米長老会宣教団のベイルートでの活動と比較する。日本側の盲点を突く提案であり、政治権力の中核から放擲された空白地帯が、欧化する都市開発のなかで教育の場に転用された例の比較としても興味深い。そこにはキリスト教宣教という世界を覆うmissionの拡散が反映する。

Konrad Lawsonは荻生徂徠をマキャヴェッリと比較する丸山眞男の比較意識そのものの西欧的拘束性を問題視し、他者の文化を自らの範疇で分析しようとする傾向からの脱却を模索する。私見では価値非拘束の比較軸などもより立てようがないからこそ、例えば西欧起源の制度や技術が非西欧各地に伝播していかなる変性を被ったかの比較といった地道な方法のほうが、徒に普遍性や客観性を求める比較文化史よりも安全弁が効いている。司会兼討論者のAdam Taibは、比較史は記述に制約が多いため密度の濃い記述が困難になる難点を指摘する一方、植民地都市として近代京都の媒介性を分析

する可能性などを示唆した。私見では、皆川淇園の弘道館の隣接地に同志社が出来、神主で南画家の富岡鉄斎も近隣に卜し、大学が近代シナ学のメッカともなった、という近代都市・京都の比較地政学も、ここから可能となるだろう。

これを受け、第二の話題ではそもそも比較は可能なのか、という問題提起。Sungeun Choは敗戦後の日本における民主主義概念を、藤田省三と松下圭一との対比において検討。東大法学部提出の博士論文に基づく分析だが、むしろ「市民」や「大衆」といった戦後日本の標語のアカデミズムにおける観念性、抽象性が浮き彫りになる。当方は佐藤誠三郎などの動向を少しは知る年配者として、発表後の雑談で、論者に現場の実態を裏話としてお伝えした。越智敏夫も戦後民主主義を日米関係のなかで検討したが、現状への嫌悪を隠さぬ即興の政治談議。平成の代替わりに関する識者のコメントを評し、金井美恵子の批判を評価する一方、高橋睦郎の天皇制擁護姿勢には辛辣だったが、陸郎がそうする裏の事情にまでは踏み込まず。「悔恨共同体」（丸山眞男）の懊悩は「日本語」の外部に伝達可能なのだろうか？

Hansun Hsiungは吉田松陰に始まる蘭語Vrijheid理解を文献学的見識も生かしつつ、縦横に裁断。フランス革命の是非

とナポレオンの英雄伝とが癒着したなかで、オランダ「独立」とも絡まる「自由」という新概念の翻訳受容の一齣。そこには republic や empire の訳語と儒教倫理との是非・相性も錯綜し、訳語選択の模索から逆に、当時の国際政治情勢や政治思想における東西の交錯が、生々しい姿で浮かび上がる。

討論者の William Schaefer を交えた討論では、越智からの発言で、平成の終焉あるいは「生前葬」から回顧して、昭和の終焉が美空ひばりや手塚治虫の死と共に記憶されたことの意味が問われ、また青年期の皇太子を身邊に持たない孤独な天皇の治世に戦争が多発した、とする中井久夫の観察も話題となった。松下の「自由」がロック流の能力概念なら、藤田は「外」からの解放に力点をおく。私見だが、舶来概念を操る政治学上の国際比較には、翻訳問題がなお開拓課題として残る。

午後の最初の基調講演では坪井秀人が山田耕筰の滞独期の作曲を扱い、ジュディット・ゴーチエ經由他で独訳された百人一首の和歌の解釈に踏み込んだ。カール・フロレンス訳で脱落した日本語の語感が、日本語には無知なはずのハンス・

ベートゲの *Nachrichtung* で回復されている箇所など、興味深い指摘を伴う見事な議論である。コメントの Carol Gluck は北米における日本研究の半世紀を回顧し、八〇年代にジョン・ホールが推奨した、「日本は例外」の類の比較史がことごとく無効になっている現状を確認した。他者の誤謬を指摘するためではなく、自己の誤謬を検出するための比較は、自己の文化を他者の範疇で検討することとも裏腹だろう。二つの対象を等距離から比較するための観察地点となるべき第三項も、実際には政治的な覇権に依存しがちであり、それが昂ずると観察者の優越感・罪障感へと逆走する。だが他者から無縁な真正なる「土着の語り」などもとより存在しない。

マルク・ブロックの比較史の提唱からカルロ・ギンズブルクの非対称比較、マルセル・デティエンヌの『比較できないものを比較する』など多くの理論的考察を動員したグラックは、結論として「設問志向の想像力」「別様に思考する」方法としての比較を提唱し、山田耕筰の場合にも、欧州經由の日本再発見という回路とともに、それに不可分な破綻あるいは挫折の内在にも言及した。横光利一の『旅愁』や同船で欧行した高浜虚子の事例も想起される。坪井との議論では、作曲家の民族性を巡って、日本や北米での滞在経験を持つプロ

コフィエフの事例や、移住した北米に没したバルトークの反ハプスブルクのバルカン性も話題となった。

第二日目には第三の論点として、物質文化、視覚文化を焦点に、比較の視点を検討した。Ming Tiampo が現代美術の展示を話題に、どのように比較が展示されてきたのかを、豊富な例を挙げつつ論じた。非欧州の美術は二一世紀初頭までは欧州中心史観の枠組みに組み込まれる場合が多かった。だが一九八六年のニューヨーク現代美術館での「二〇世紀の未開主義」展への悪評をひとつの転換点として、欧米の主要都市における展示でも欧州優位の姿勢は急速に後退してゆく。とはいえモノと浮世絵を並置するカナダの展示では、近年でもなお主客の位置格差は動かない。だがこれとは対照的に、日本の国立西洋美術館では欧州のまなざしに映った北斎を展示するという転倒が二〇一八年に企てられる。そうしたなか論者は、北川フラムが中心となり針生一郎が協力した一九八八年の先駆的な「アパルトヘイト・ノー」に注目し、亡命と連帯との弁証法に、比較展示の可能性を探る問いを投げかけた。続く稲賀は、西欧起源の技法の非西欧世界での受容にともなう変質、西欧側の主張する普遍性が国際関係のなかで被る

脱構築、さらに宗教上の基本概念が翻訳を通してどこまで等価性や共約可能性を維持でき、それにはいかなる政治的条件が求められるのか、それぞれ、透視図法、森鷗外の国際赤十字会議における発言、さらにキリスト教のケノーシスと禅の「無」や仏教の「空」との交渉を具体例として検討した。とはいえAaron Mooreを交えた討論では、比較を許す枠組みの本質的な恣意性に関わる認識は、なお比較史学の専門家に共有されているとはいいがたい現状も露呈した。「等価性」の代わりに「類似性」を問題にしては？という提案もなされたが、類似の基準が価値判断から自由でないことは渡邊慧の「見にくいアヒルの子」の定理が見事に立証するところ、というのが稲賀の素朴な持論である。

午後にはもうひとつの基調講演として本年九〇歳の長老Harry Harootianが「比較の想像力」と題し、セミナーでの授業風景を彷彿とさせる談話。空間性より時間性を優先させる近年の持論を基礎に、ジャック・ランシエールの『プロレタリアの夜』とペーター・ヴァイスらの「抵抗の美学」および成田龍一（故）道場親信らが近年取りあげるサークル運動を連関させて論じようとする。論者が「地学的想像力」geological imaginationを強調するので、酒井直樹の「地理学

「想像力」geographical imaginationとの対比を質してみたが、日常の労働時間での重ね描きが透視される地層の分断や断層／褶曲に権力への抵抗の兆候を捉える意識は、酒井の国民国家批判の枠組みとは大きく乖離している。討論後の雑談で、ハリーとは戦後同時代の生き証人である竹村民郎の「職場の歴史」とイタリアで精神病院廃止に尽力したフランコ・ヴァザーリアの事例の比較などを論じて興じた。グラックもハルットゥニアンと「多元的時間性」の概念について遣り取りしたが、議論は平行線。

最後の円卓討論では、歴史家と文藝・美術研究者との議論がなぜか噛み合わず、欲求不満が嵩じたので、発言した。ハリーとはかつてシカゴで翻訳について公開討論をした経験がある。その延長だが、谷崎の『細雪』は北米では *Makioka Sisters* と改題された。その背後にはトーマス・マンの長編に印象を重ねようとする出版戦略が隠されていた。この小説の終末の春子の「下痢」の記述は、日本語の自在な時制感覚と話者の（自由間接話法による）流動性が英語流に整序された結果、英訳で読むと、いかにも唐突との印象を免れない。だがアンガス・ウィルソンはその唐突さにこそ、小説の将来へ

の可能性を発見した—と思い込んだ。これは片岡真伊の博士論文の一章からの知見だが、こうした翻訳上の「等価性」の逸脱から、「比較」の実態も露わになる。大上段に振りかぶった比較方法論は見落としがちだが、ここに露呈するような落差や誤解の蓄積こそが、グラックの提唱した「比較」の教訓であり、ハルットゥニアンが問題にした、「時間の搾取」を隠蔽する文化交流史上の詐術だったのではなからうか。

引き続き Aaron Moore が別会場で「戦時下の子供たち」の国際比較について講演。質疑応答で些か発言。まずここで取り上げられた対象と同一の世代が『細雪』訳者のサイデンステッカーやドナルド・キーンと重なること。またこの世代の日本人が受けた自由作文教育が彼らの戦争体験証言の文体に影響している可能性のあること。日本人の証言に顕著な時間軸にそった羅列にも、年表を重視し因果律に無頓着な日本の教育方針が反映していること。最後に同世代の女性たちの「生活綴り方」が、戦後に官学の史学から解放されたルポルタージュへの可能性を開く一端をなし、この現象はナタリア・ギンズブルグの『ある家族の会話』のかたわらで、同時代の他のアジアとの比較に値すること。

まだ未成熟な議論が残り、複数、専門分野を跨ぐ意見交換の

必要も痛感された。だがそれゆえここには、なお未開拓な可能性も秘められている。以上、きわめて簡略な報告に止まる。会議直後に報告執筆の暇がなく、割愛した論点も多い。最後に、会議を組織しお招き頂いたダーラム大学の Adam Bronson、印南美沙子両氏に心より謝意を述べたい。

二〇一九年六月二八日記

(国際日本文化研究センター教授)